

龍城山下の仲間たち



地元愛あふれる 仕事

郷土史家
桜井 祥行氏
(高32)

出会いは38年前のテニスコート。軟式テニス部には、当時同期生が10人ほどいました。周りにより明らかに子供っぽい卵顔の少年が、今や風格ある長身白髪のジェントルマン。「同期には郷土史家の桜井君がいます」と言えばどこへ行っても通じるくらい。様々な研究会、講演会、執筆をこなし、ずいぶん顔が広いのです。

さて、そんな彼の昔を、同期のよしみで少しばかり紹介させていただきます。

高校1年時は早弁、昼休みのコート整備。練習前は城池周囲ランニング、声出し。それから男子のみのエピソードもたくさん。反省会の正座。夏合宿では、柱にかじりついで「セミ」という儀式。何とも辛勞しそう。先輩のしごきにはやきながらも、飄々と観察分析し改善して受け継いでいったのでしよう。後輩をとてかわいがり、慕われていました。

そんな部活も勉強も、やや欲求不満があったとのこと。表面上はおちゃらけながら、内面は将来の人生設計が描けず鬱屈した高校生活だったと述懐。さながら太宰か芥川のような感じ。そのためか、立命館大学では文学部を専攻し、まだ人民服一色だった中国をカラフルな服装で旅して、巷のヒーローになった体験が。それが、歴史家としての人生に寄与しているのでしょう。

その後、葦高で鈴木徹也(高10)指導教官の下で教育実習をやり遂げ、歴史教師となります。最初に赴任した女子高で化学教師の女性と出会い結婚。(現葦高講師)娘2人に恵まれ、下の娘さんは昨年度まで葦高テニスコートで白球を追っていました。

2校目に赴任した高校での体験を小説に書き上げ、早くも処女作『濁流』(伊豆新聞社)を出版します。「えらい！」



当時子育て中だった私は、同期の快拳をみんなに宣伝し自慢して回りまわした。

教師として担当した部活は硬式テニス。プレーヤーとして駄目だったから指導者の道を歩んだということですが、持ち前の研究心とお世話心で熱が入ったようです。試合での恩師や先輩との

再会も楽しそうでした。

数年後、県の教育委員会へ。3年間ものつもりが何年も原級留置で「早く学校に戻りたい」が口癖でした。そして、藤枝にある警察学校の副校長などを経て、現在は東海岸にある県立高校で校長職。赴任1年目にして、キャリア教育で文部科学大臣賞に輝きました。郷土史(歴史教育と歴史研究)はライフワークで、世界と伊豆のつながりを研究。仲田正之先生(高17)にご教示いただいたそうです。

同窓会のメルマガに連載中の「葦山高校の歴史とその周辺」は、ひよんなきっかけから始まりました。

平成21年秋の国民文化祭に合わせ、志龍講堂で、明治時代からの葦高関係資料が公開展示されました。当時葦高資料室担当の野中良久先生(高18)と市文化財保護審議会委員であった桜井氏が、数年来整理してきた資料を多くの人々に見てもらいたいと願い企画し、元葦高校長の河野真人氏(高16)らに働きかけ公開が実現したものです。その時、同窓会ホームページ担当の土屋祐子さん(高30)から声がかかり、連載がスタートしたそうです。足かけ6年、現在35話。同窓会ホームページで読めるので、是非ご一読ください。

昨年から伊豆日日新聞日曜版に連載している「伊豆碑(いしづみ)巡り」は、20年以上前に県史編纂調査委員だった頃から、伊豆の各地を歩いて調べてきた様々な石碑を、市町ごとに紹

介しているものです。路傍の石碑に秘められた過去の歴史を伝えていきます。

この研究は、『伊豆碑文集』(全2巻、私家版)にほぼ収められています。(伊東市のサガミヤ書店にあります)郷土史を語り合うきっかけになりそうです。

10年ほど前に出版した『伊豆と世界史』(批評社)は絶版とのことですが、昨年3月に出版した『静岡と世界』(羽衣出版)は、書店にあります。かなりの大著ですが、「世界史を選択する生徒が減っている中で、地域にある世界とのつながりを掘り起こしたくて書いた」と言います。もちろん三島の文盛堂書店(村上新吾さん高32)や、修善寺の長倉書店(長倉一正さん高37)にも置いてあります。

現在は、「葦高校歌作詞者であり大先輩である、歌人穂積忠の研究がまたまりそう」とのこと。

これからの予定については、「葦高創始者の一人である柏木忠俊先生の、足柄県令時代の行政史についてまとめたい」と意欲満々です。

本紙で同期の仕事を紹介できるとは、私にとってまたとない光栄でした。地方創生が叫ばれている今、地域発信競争が始まっています。伊豆人の苦手な発信を、外に出ている人、地元にいる人、みんなが協力してやっつけていこうではありませんか。我ら同期の幹事長「桜井君」の仕事が、そのきっかけになることを願っています。

文責 杉山政代(高32)